

鳥獣人物戯画(戯れる動物の巻物)

鳥獣人物戯画は、12～13世紀に描かれた4巻の絵巻物で、日本の代表的な芸術作品の1つである。人間の営みを行う動物を描いた白黒の絵画は、多大な影響を与えてきた。説明文はなく、作者も不明で、一部が紛失している。画家であり僧侶でもある鳥羽僧正(1053～1140年)の作品とする説もあるが、確証はない。

第一巻、甲

第一巻は、入浴したり、食事の支度をしたり、法要に参列する様々な生き物が描かれている。動物にはウサギ、カエル、キツネが含まれる。ウサギとカエルが猿を追いかける場面や、ウサギが鹿に乗る場面などが有名である。高山寺の境内の石水院にその複製が展示されている。

第二巻、乙

これらの場面は、牛、鶏、犬などの家畜を組み合わせている。龍やキメラのような神話上の生物、象や豹など日本原産ではない動物もいる。

第三巻、丙

この巻の前半は人物戯画である。後半は人間の営みを行う動物を描いている。ある場面では、牛車を引くカエルと猿が描かれている。

第四巻、丁

この作品は博打、競り合い、朝廷を訪問したりする人間の風刺画を特徴としている。